

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

November, 2017
Vol. 4

初夏の北欧5カ国へ

特集

第二特集

ベネズエラ オーケストラ

北欧5カ国の船旅

清々しい初夏に訪れる

北欧全5カ国と北極圏をゆく、2018年5月出発の第98回クルーズ。初夏に訪れるこの船旅では、人々を魅了し続ける、まるで絵本の中に迷い込んだような美しい街並み、雄大なフィヨルド、そして幻想的な「白夜」が私たちを待っている。森と湖のヘルシンキ、水の都ストックホルム、中世の歴史が残るコペンハーゲン、フィヨルドが待つベルゲン、そして大自然のレイキャビク。あこがれの北欧全5カ国を一度で訪れる贅沢な船旅へ出かけよう――



 Helsinki [ヘルシンキ・フィンランド]

 Stockholm [ストックホルム・スウェーデン]

 Copenhagen [コペンハーゲン・デンマーク]

 Bergen [ベルゲン・ノルウェー]

 Reykjavik [レイキャビク・アイスランド]



CONTENTS

特集

清々しい初夏に訪れる

北欧5カ国の船旅 P2

第二特集

ベネズエラ オーケストラ P9

PEACE BOAT NEWS

おりづるプロジェクト P12

寄港地フォーカス

インドネシア・バリ島 P13

水先案内人インタビュー

枝元 なほみさん P15

洋上居酒屋

「波へい」にいらっしゃい! P17



Ocean Dream

タヒチ・パペーテ港停泊中のオーシャンドリーム号

表紙の写真

ノルウェー・ベルゲンから行くソグネ
フィヨルド。第98回クルーズで航行予定。



船旅を選んだからこそ堪能できる、地球が生んだ芸術作品

Sognefjord

ソグネフィヨルド・ノルウェー



5:遊覧する船と並走してカモメが遊びに来てくれた。6:気が遠くなる程の長い歴史がこの急斜面をつくりだした。7:デッキの椅子はフィヨルド遊覧の特等席に。8:全長204kmを誇るだけあって遠くまで景色は広がる。9:フィヨルドをこの距離で見られるのは船旅ならでは。

5:遊覧する船と並走してカモメが遊びに来てくれた。6:気が遠くなる程の長い歴史がこの急斜面をつくりだした。7:デッキの椅子はフィヨルド遊覧の特等席に。8:全長204kmを誇るだけあって遠くまで景色は広がる。9:フィヨルドをこの距離で見られるのは船旅ならでは。

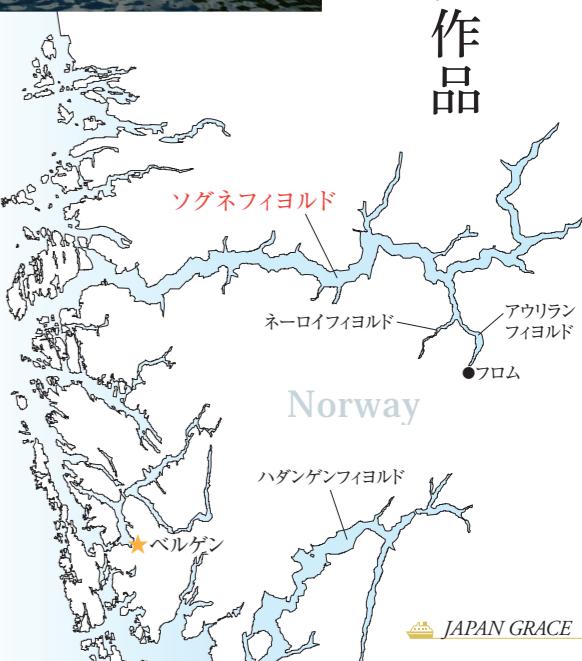
誇るネーロイフィヨルド。ソグネフィヨルドの支流の二つで、一番狭い部分の距離はわずか250m。左右に迫る急峻な山々の迫力には圧巻のひとことだ。

今なお刻々とその姿を変えるフィヨルド。この景色を見られるのは今この瞬間だけ。地球の壮大な歴史が生んだ芸術作品が私たちを待っている。

まるで別世界に迷い込んだかのようないいナミックな光景。ここは全長204kmにも及ぶノルウェー最長のソグネフィヨルド。フィヨルドとは、氷河が数万年、数十万年の時間をかけてゆっくりと大陸を削り、そこできた谷に海水が入り込んでつくられた奥深い入り江のこと。眼前に広がる1000m級の美しい山々と入り組んだ海岸線が、地球の壮大な歴史を物語っている。

穏やかな水面に映る航跡はいつになく美しく、ゆつたりとした時間の中、船は進む。しばらくすると山間のところどころでカラフルな小さな家々が見え、まるで絵本の1ページに吸い込まれたかのような世界が私たちを待っている。

ソグネフィヨルドの支流奥深くに進むにつれ、次第に山肌が船に近づいてきた。ここはフィヨルド世界最狭を





ロシアと欧洲の文化が交じり合った クラシカルな「森と湖の国」

たくさんのカモメたちが、入港した私たちを迎えてくれる。港のほど近くにはマーケット広場があり、おしゃれでかわいい北欧雑貨から色鮮やかな野菜や果物、そして新鮮なサーモンのお店が並ぶ。ちょっと小腹を満たしてから街歩きに出かけるのもよい。

港から街の中心部までは徒歩で15分ほど。この街は帝政ロシア時代に遷都され、地理的な条件から今もロシアと欧洲の間にあることを感じさせる独特の雰囲気が漂う。中心部には大きな建物が並ぶが、フィンランドの6割は森で、湖が18万個あるといわれるほど自然も豊富。そのため中心

部とはいえ空が広く緑も多いため、街歩きをするにはとても気持ちがいい。

この街で訪れておきたい場所の一つは街のシンボルである「ヘルシンキ大聖堂」。壮麗な佇まいもさることながら、ひときわ目を引くのはその大きな薄緑色のドームが印象的で、ヘルシンキでもっとも古い歴史を持つ地区にあるため、現地の人々に親しまれている場所もある。「ムーミン」の作者トーベ・ヤンソンの故郷としても知られるヘルシンキ。街並みのみならず、郊外のヌーベルシオ国立公園でのハイキングや農場見学など、のんびりと流れる時間も楽しめる寄港地だ。

映画のワンシーンのような光景が続く 「北欧で最も洗練された街」



2万以上の島々が連なる水の都・ストックホルム。近代都市でありながら中世の趣が残る見どころ満載の街だ。特に港からすぐのストックホルム旧市街・ガムラスタン地区は美しく荘厳な景観が印象的。カラフルな建物と石畳、そして時折現れる細道。どこを→

歩いてもまるで映画のワンシーンのような風景が続くのはこの街ならでは。お土産の購入にもぴったりな雑貨店も多く、北欧好きにはたまらない。

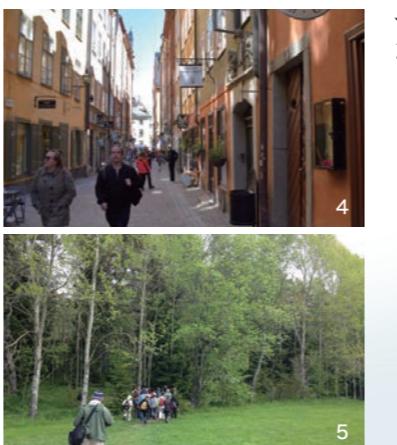
このエリアで訪れておきたいのが、スウェーデンを代表する人物であるノーベルの博物館。ノーベル賞にまつわる展示のほか、受賞者の作品コレクションを楽しめる。また授賞式の晩餐会で出されるチヨコレートやアイスクリームもここの味わえるというから要チェック。

そんな魅力いっぱいのこの街、実は市バスのほとんどが自然エネルギーを使っていたり、教育や女性の雇用にこでは味わえるといふから要チェック。



豊富な歴史と童話が紡いだ 中世の歴史が残る「おとぎの国」

Denmark



4:どこを切り取っても絵になる歩いて楽しい街だ。
5:自然豊かな国立公園も観光スポットの一つ。

も積極的だつたり、自然と共生した先進的な都市でもある。「北欧で最も洗練された街」といわれる所以は、街の所々で感じられるはずだ。

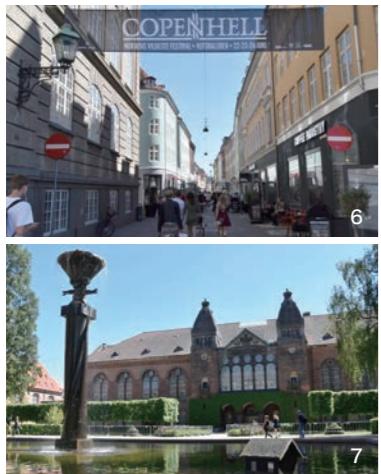


ストックホルム・スウェーデン

夏になるとオープンテラスで楽しく過ごす人たちで街は賑わう。



想像していたよりも
小さいという声も多
い「人魚姫の像」。



6:街中はカフェやショップも充実。人それぞれの楽しみ方ができる街だ。
7:市内にある博物館や庭園は市民の憩いの場となっている。

コペンハーゲンには、色鮮やかな建物が並ぶニューハウンをはじめ、中世の歴史ある建築物が今も多く残されている。市の条例により高い建物を建ててはいけないことが決められており、「おとぎの国」と呼ばれるのにふさわしい美しい街並みが広がっている。

この街を訪れたなら見ておきたいのが「人魚姫の像」。アンデルセンの物語『人魚姫』をモチーフに作られたこの像を一目見ようと、ひときりなしに多くの

観光客が訪れる定番の場所だ。この像のすぐそばにあるのは、カステレット要塞。もともとコペンハーゲン港の入り口を防御するために造られたが、今では赤レンガと深い緑のコントラストが美しい公園として人々の憩い場になっている。その他、1843年に開園した世界最古のテーマパーク「チボリ公園」や、シェイクスピアの戯曲『ハムレット』の舞台として知られる世界遺産クロンボーエ城など、観光には困らない魅力的な街だ。



Copenhagen

コペンハーゲン・デンマーク

色とりどりの建物が並ぶニューハウンは必見。
運河ツアード街一周するのもおすすめだ。



Helsinki

ヘルシンキ・フィンランド

1:整然とした街並みは北欧の旅の始まりを感じさせる。2:マーケット広場で食べるシーフードは絶品。3:緑があふれる街中には市民の足となるトランも走る。



小高い丘の上にそびえる「ヘルシンキ大聖堂」。大階段に腰を下ろすと街を一望できる。



中世にタイムスリップできる 「フィヨルド観光の玄関口」

ハンザ同盟の中心地として中世に栄えた街・ベルゲン。当時貿易を行っていたブリッゲン地区には、世界遺産にも登録された色鮮やかな木造建築が立ち並ぶ。今では雑貨屋やレストランになっているこれらの建物は、当時は商人たちの事務所として使われていたという。このブリッゲン地区、木造建築の持つ暖かみからだろうか、街を歩いているとまるで中世にタイムスリップしたかのような不思議な感覚に陥る。

そんな街で食べるサーモンをはじめとした新鮮な魚介類は絶品。魚市場は買ったその場で食べられるイートインコーナーも充実していて、街歩きに疲れたらここで一息つくのもよいかもしれない。

魚市場から歩いて5分の場所にはケーブルカー乗り場があり、ベルゲンの街と港が一望できる標高320mのフロイエン山頂上へ行くことも可能。フィヨルド遊覧の「入り口」にあたる港町ベルゲン。小さい街だけれども、ノルウェー観光には外せない街の一つだ。

三角屋根のかわいい木造建築が並ぶブリッゲン地区。世界遺産にも登録されている名所だ。



「自然と共存したエネルギー大国」

世界最北に位置する首都として知られるレイキャビク。港から街を繋ぐ道は、どこでも続く一本道。他の北欧の寄港地に比べ、何と言つても壮大な大自然が魅力の場所だ。もともとアイスランドは自然エネルギーを利用した施設が多く、地熱水力などを使った「自然エネルギー」先進国」と呼ばれるくらいだ。

その中でも地熱を活かした世界最大の露天温泉「ブルーラグーン」は観光客にも大人気。温泉全体を一周するだけで十数分かかるほどの広さで、それら一帯の青みがかった乳白色のお湯から湯気が立ちのぼる様子はとても幻想的。島の南西部一帯に広がる「ゴールデン

サークル」と呼ばれる大自然を感じられるエリアも必見。代表的な観光スポットの一つは迫力満点の間欠泉「ゲイシル」。热水が噴き出す様子はまるで地球が呼吸しているかのよう。約4~8分間隔で热水が噴き出し、その高さは10~20m、時には40mに及ぶこともあるという。それ以外にも、アイスランド語で「黄金の滝」という意味の「グトルフォス」では、幅70m、落差30mに渡って豪快に水煙を上げながら水が流れ落ちる。晴れた日には虹がかかり、黄金色に輝く様子からこの名前がついた名所だ。北欧のラストにふさわしい、地球の鼓動に触れられる魅力満載の寄港地だ。



5:運がよければ虹がかったグトルフォスの滝が見られる。6:歩行者天国のゲートが自転車の形に。7:ブルーラグーンは現地の人もよく訪れる。8:間欠泉は人と比較するとその高さに驚く。



Reykjavik レイキャビク・アイスランド

おもちゃ箱のようにカラフルでかわいい世界が広がる。



1:少し街を離れるとどのか風景が広がる。2:歩いているとユニークな建物を発見。3:フロイエン山はハイキングコースもある。4:教会は街のあちこちに。



Nordic Food & Goods

フィンランド



フィンランドはサンタクロースの国としても知られる。

日本では買えないようなムーミングッズが充実。お土産にぴったりだ。

スウェーデン



北欧の雑貨はお土産に大人気。

船旅だから北欧食器も安心して持ち帰られる。

サーモンのキッシュはボリュームもあって美味。

デンマーク



新鮮なシーフードは北欧の国によって食べ方はいろいろ。

クッキーの容器までとってもチャーミング。

ノルウェー



日本でも有名なノルウェーサーモンを使った料理は美味。

伝説の妖精トロルはお土産にも人気。

スーパー・マーケットには色とりどりのサラミが並ぶ。

アイスランド



種類も豊富でラベルもかわいいらしいショップ。

トロルの置物はここでも、国によって伝わり方が異なる。

北欧は魚料理がメイン。寄港地ごとの食べ比べもおもしろい。

ベネズエラ オーケストラの奇跡

音楽が子どもたちを救う



1:20名の若き音楽家たちとデッキで集合写真。2:船内ではさまざまなシーンで素敵な演奏を披露してくれた。3:アブレウ博士(右)はピースボートに乗船したこともある。4:難民キャンプでも演奏者たちは大人気。



無料音楽教育プログラム

El Sistema

エル・システム

貧富の差が激しいベネズエラの地で生まれた、子どもたちをオーケストラに無料で参加させることで犯罪や麻薬に走ることを防ぎ、社会参加を促す無料音楽教育プログラム「エル・システム」。2006年から毎年交流を続けているピースボートは、今年、第94回クルーズで2つのプロジェクトを実施した。



ベネズエラとエル・システム

ピースボートが毎年訪れている南アメリカ最北端の国、ベネズエラ。国別原油確認埋蔵量は世界一を誇るが、近年では原油価格の下落により経済破綻を引き起こし、政治・経済・社会不安というテーマでニュースに取り上げられることが多い。社会主義国家であるベネズエラにとって、1992年代に石油が始めた頃から国としては急速に豊かになつたものの、国内では貧富の差が発生。次第に街中にはストリートチルドレンがあふれ、犯罪に手を染める子どもたちが出てくるようになつていた。

そういう時代が長く続き、この状況

れているベネズエラでは十分に楽器が揃つておらず、段ボールで作ったバイオリンで練習をしている子どもたちがいるのが実情。そのため、ピースボートスタッフが小学校などに電話をして使われなくなつたものを譲つてもらうという地道な活動を続けて楽器を集めている。このプロジェクトは今年で10年目を迎え、今まで合計450台以上の楽器をベネズエラの子どもたちに届けてきた。

そしてもう一つの活動が、彼らをピースボートに招待するオンボードプログラム。第94回クルーズでは、団員の9割がエル・システム出身者で構成される「カラカス市民オーケストラ」所属の若き音楽家20名がピースボートに乗船。来日して2週間は各地で演奏したり、ホームステイを体験したりし、4月12日の横浜港出航から6月22日のベネズエラ・ラグアイラ港寄港まで72日間をピースボートの船の上で過ごした。

船内では大小合わせて100回以上の演奏を行い、洋上運動会では彼らがファンファーレを務めるなど、乗船者を大いに楽しませた。他にも全10回のチャリティーレッスンが行われ、最後に受講者によって行われた「みんなのコンサート」では、「きらきら星」と「よろこびの歌」を大合奏。たった10回のレッスンとは思えないクオリティに会場は大きな拍手に包まれた。

彼らは後述する「おりづるプロジェクト」にも同行し、ギリシャではスカラマガス難民キャンプを訪問。実はこのキャンプでは、昨年エル・システム・ギリシャが設立されたばかり。受け入れられている約3200名のうち半数が子どもで、なおかつ音楽へのアクセスがほぼ皆無。そのような状況に、ベネズエラ生のエル・システムはびつたりだった。ピースボートを通じてエル・システムの輪は世界へと広がっている。



5:船内企画を数多く実施され、乗船者はすっかり彼らの音楽の虜に。6:レッスンは小さな子どもからシニアまで参加。船内で覚えたばかりの日本語で丁寧に教えてくれた。

を開しようと立ち上がったのが当時文化大臣のホセアントニオ・アブレウ博士。自身が音楽家ということもあり「銃ではなく音楽を」というメッセージのもと、誰でも無料で受けられる音楽教育プログラム「エル・システム」を1975年に創設した。たった11人の子どもたちを駐車場に集めて始まったこの取り組みは、今では78万人以上の子どもたちが関わっている大きなプロジェクトへと変貌を遂げた。世界的にも有名な、2017年のウイーンフィルハーモニー・ユーロコンサート指揮者を務めたグスターボ・ドウダメル氏もこの出身だ。

ピースボートがエル・システムに出会ったのは2006年のこと。ピースボートスタッフがベネズエラ寄港の準備で訪問した際、子どもたちが電車の床に着き、そうなくらい大きな楽器を背負い、首都カラカスのエル・システム本部に練習に通つている姿を目にした。音楽を奏でたまま、オーケストラを通して協調性や自立心を学ぶ社会に惚れ込み、ピースボートとエル・システムの交流が始まった。



2

3

1

4

5

6



今回のプロジェクト参加者たちが出航前に記念写真。

「核兵器を禁止するには、市民レベルの活動が非常に大切です。みんなお身体を大事にして活動を頑張ってください」。第94回クルーズの寄港地ニューヨークで面会した中溝泉国連事務次長は、国連を訪れたピースボートをはじめとした日本のNGO団体や被爆者団体にそう伝えた。



ロシアでは Chernobyl の記念碑を訪れた。



おりづるプロジェクト

ヒバクシャ地図一周 証言の航海

第94回クルーズ

ピースボートでは、被爆国・日本を本拠とする国際NGOとして、核兵器の非人道性を世界に訴え、核兵器を非合法化するための行動として2008年より「おりづるプロジェクト」を実施している。第94回クルーズで10回目となる本プロジェクトでは、広島・長崎の被爆者と共に18カ国21都市で原爆被爆の証言を実施。核廃絶のメッセージを世界に届けた。



船内の展示は多くの人が足を止め真剣に見入っていた。

「核兵器を禁止するには、市民レベルの活動が非常に大切です。みんなお身体を大事にして活動を頑張ってください」。第94回クルーズの寄港地ニューヨークで面会した中溝泉国連事務次長は、国連を訪れたピースボートをはじめとした日本のNGO団体や被爆者団体にそう伝えた。

ピースボートが「おりづるプロジェクト」を始めたのは2008年のこと。世界の核廃絶を目的に、広島・長崎の被爆者がピースボートクルーズに乗船し、世界の寄港地で市民や学校・政府関係者に向けた被爆証言と核廃絶への思いを伝える活動を行っている。

今回のプロジェクトに参加したのは7名。さらに本クルーズからは被爆者年齢が80歳を超える、消えゆく証言者の貴重な声を次世代に語り継ぐための活動がスタートした形だ。

寄港地の活動では、核兵器禁止条約への賛同と交渉会議参加を各国に求めた。フランスのル・アーブルを訪れた際は、原発問題に関心のある一般



全21都市で証言活動を実施。



みな真剣に耳を傾け署名をしてくれた。

「おりづるプロジェクト」を始めたのは2008年のこと。世界の核廃絶を目的に、広島・長崎の被爆者がピースボートクルーズに乗船し、世界の寄港地で市民や学校・政府関係者に向けた被爆証言と核廃絶への思いを伝える活動を行っている。

今回のプロジェクトに参加したのは7名。さらに本クルーズからは被爆者年齢が80歳を超える、消えゆく証言者の貴重な声を次世代に語り継ぐための活動がスタートした形だ。

寄港地の活動では、核兵器禁止条約への賛同と交渉会議参加を各国に求めた。フランスのル・アーブルを訪れた際は、原発問題に関心のある一般

都市における活動で集めた国際署名の数は1765筆。第94回クルーズで本プロジェクトも10回目となつた。そんな節目となる年に、122の国と地域の賛成により核兵器禁止条約が採択。本当に平和といえる未来が実現するまで、本プロジェクトはこれからも活動を続けていく。



参加者の音楽経験はさまざまだが、みるみるうちに上達。

6月22日、ピースボートはベネズエラ・ラグア・イ・ラ港に寄港。音楽交流プログラム「エル・システムの魅力にせまる」に参加した乗船者は約80名。船内生活を共にしたオーケストラメンバーのクレオと呼ばれる音楽練習所を訪れ、現地の子どもたちの音楽に触れた。

夕方には、ベネズエラ外務省、カラカス市、カラカス市民オーケストラ、ピースボート共催で「平和と友好のセレモニー・コンサート」を開催。カラカス市内にある市立劇場は、ピースボート参加

者やカラカス市民で満席になった。コンサートではカラカス市民オーケストラを代表して乗船した20名のほか、カラカスで彼らの帰国を待ちわびた仲間たちも合流。総勢100人による演奏に合わせ、乗船者有志によるコーラスが「アルマ・ジャネラ」「ベネズエラ」という曲を共演。最後の一曲が終わると会場中は拍手喝采。そんな中、突如始まったのはなんとソーラン節とクルーズ出航テーマ曲のサプライズ演奏。思つてもいなかつたプレゼントに、みな涙を流し、ホール全体が感動に包まれた。「また会う日まで」そう言つて彼らとの72日間は幕を閉じた。

ベネズエラオーケストラの次回乗船予定は第102回クルーズ。また会うその日まで、彼らは今日もベネズエラ市民のために音楽を奏で続ける。



1:カラカスでは子どもたちの音楽練習所を訪れた。2:彼らの表情から真剣さも伝わる。3:メンバーはもちろん日々の練習も欠かさない。4:楽器は難しくてもコーラスならと多くの乗船者が共演。



無料音楽教育プログラム
El Sistema
エル・システム



1:インドネシアのビールといえばビンタン。2:小さい子から大人までみな毎朝のお祈りは欠かさない。3:運がよければ街中でお祭りが見られる。



女性の正装は「クバヤ」と呼ばれるものを着る。

宗教なしには語れない 信仰と芸能の島

インドネシアの8割以上の人々はイスラム教を信仰している。そのような中、バリ島だけがバリ・ヒンドゥー教という独自の宗教で成り立っていることはあまり知られていない。もともとインドネシアはインドとの交易が盛んで、ジャワ島を中心にヒンドゥー教が広がっていた。しかしその後マレー半島経由で伝わってきたイスラム教がインドネシアで勢力を拡大。結果としてジャワ島のヒンドゥー国家が倒され、彼らがバリ島に逃れてきたことで、バリ・ヒンドゥー教の島ができあがった。

この島に住む人々の生活は朝のお祈りから始まる。街を歩いていると、1日3回するのが良いとされるこのお祈りのシーンに巡り合うことも多い。さらにつここの島でよく見かけるのが、チャナンといわれる供物。椰子の葉で編まれた小さな皿の中に色とりどりの花が盛られ、台所や玄関をはじめ車や仕事道

具まで、神々が宿るとされるすべてのものに供えられている。彼らがこのよう

な信仰の力を特に發揮するのはお祭

りのとき。神様に美しいものを見せよ

うと、舞踊や供物づくりに力を注ぐ。

バリの伝統舞踊といえば躍動的な音色

で奏でられる「ガムラン音楽」が有名。

さまざまな金属打楽器が生み出す美

しい音色を聞くと「神々が宿る島」に

やつてきたことを実感するだろう。

宗教には厳しい彼らだが、私たちが

バリ・ヒンドゥー教に尊敬の念を持つて

いるとわかると、あたたかく迎えてくれ

る気さくな人々もある。そのため、寺

院を訪れる際にはTシャツ、ジーパンな

どカジュアルな服装ではなく、バリ人と

同様の正装をしたり、お供えの花を持つ

ていつたりするのが望ましい。他にも神

に近い存在とされる3歳までの幼児の

頭部を触ってはいけなかつたり、不浄の手

とされる左手で握手をしてはいけなかつ

たりとタブーは多いが、それらを気に留

めていればきっと親しくなれるはずだ。

ナビイさんも「バリの魅力は人。ぜひ現地でバリの人々と会話し、バリ芸能を

肌で体験してほしい。そのことで、この島

だけに根付いた彼らのアイデンティティや宗教観、そして彼らの人間性に触れることができるはず」と話す。1日も

過ぎせば、この島が世界中の旅人を魅了し続ける理由がきっとわかるはずだ。



4:チャナンと呼ばれる供物は各家庭で毎日神様に捧げられる。5:お祭りの前になると、村中の女性たちが供物の用意に精を出す。6:緑に囲まれ島全体にゆっくりとした時間が流れれる。



ナビイ 寿 [kotobuki]

ナーケシヨシミツと共に寿 [kotobuki]でミュージシャンとして活躍中。沖縄、八重山の島唄とバリダンスをこよなく愛し、現在はインドネシア・バリ島に在住。ピースポートに水先案内人として何度も乗船している。



バリの楽器は日本で見かけないものばかり。

ミーゴレン、ナシゴレンなど辛めの味付けがバリ島の特長。



2018年3月、ピースボートクルーズの原点であるアジアをめぐる47日間のグランドクルーズが出航。18年ぶりの寄港となる東ティモールや、クルーズならではのハロン湾周遊に加え、最大の見どころの一つが「神々が宿る島」とことインドネシア・バリ島。現在バリ島に住み、アーティストとして活躍するナビイさんにこの島の魅力を伺った。



善と惡の果てなき戦いを踊る
パロンダンスは見ていて飽きることがない。



ほんとうの「ちそうつて?」

―― 違いをちがいとして納得すること――

料理研究家 枝元なほみ

料理研究家として、テレビ、新聞、ラジオなど幅広く活躍する枝元なほみさん。最近では、全国各地をまわるうちに「食」を考えるには農業や漁業などの生産の現場を支えることが必要だという思いに至り、生産者と消費者をつなげる一般社団法人「チームむかご」を設立。ピースボートには、これまでに第83回、第91回世界一周クルーズに水先案内人として乗船している。そんな枝元さんに普段の旅との違いやピースボートの食事について話を聞いた。

✿ 旅行というよりそこに暮らしている感覺

「ピースボートに乗っていると、明日なにしようかなって思いながら毎日寝るんです」。枝元さんにピースボート乗船の感想をたずねると、笑顔でそう振り返る。興味のある国には一人で旅に出ることもあるという枝元さん。ピースボートのことは知っていたものの、いざ乗つてみると普段の旅との違いを感じたといふ。

「一人旅だと明日の宿泊先はどうしようとかいろんな不安もあるんです。でもピースボートは毎日の寝る場所も決まっているし、旅行というよりもそこに暮らしている感覚に近かつたんです。



世界のいろんな寄港地に行けるという楽しさはもちろんですが、やっぱり船上を楽しめるのがこの旅の最大の魅力かもしれません」

料理研究家である枝元さんにとって、寄港地の楽しみはなんといっても食。印象的だった港町をたずねてみると、各地それぞれ思い出があるけれどドイツのハンブルクかな、と。「ハンブルクで食べたのは、ニシンの酢漬け。スタイルにカットしてあって、お店の雰囲気もすごくよかつたんです。ほかにもパンの焼き加減がすごく上手で、寄港地のお店選びは毎回真剣勝負です」

さらに世界中の港町を巡るというこ

の船旅のスタイルにも心底惚れ込んだ様子。「港に着いてそのまま街に出かけるというのもすごく好きなんです。港街には古くから船で来ている人たちを受け入れている独特の雰囲気もあります。それに私の祖父が氷川丸の船乗りだったこともあります。船乗りの血が騒ぐいつも言つていました(笑)」

✿ 船内の食事には大満足

乗船を検討している人にとって気になることのひとつが船内の食事。料理のプロである枝元さんに、率直に船内の食事の感想をたずねると、「すごくお

話については、「大切な人に『食べてほしい』と思えるもの、それこそが本当のおいしい料理でもあるしじちそう『だと思ふんです。どちらの料理がおいしいとかではなく、大事なのは違いをちがいとして納得すること』。これは旅することにも似たようなところがあります。実際に旅をすると、いろんなところでいろんな人が生きているんだなと感じます。そういう多様な価値観の中に身を置いて、いいも悪いもなく、同じ時間を作り出せるというのを感じます。実際に旅をすると、いろんなところで買えないといけないことはあります。毎日を過ごしやすいように、港に着いて野菜とか肉とか全部自分で買い集めないといけないことはあります。毎日を過ごしやすいように、すごく上手にサポートしてくれるけど、その旅をどう彩るかは自分次第」

24時間全部を自分のために使つていいんだ、大人になつてからなかなかないことだからね、と最後に笑顔で話してくれた。世界中にある「おいしい」や「楽しい」といったものに触れ、違いをちがいとして納得できること。ピースボートは世界一周をしながら、そんな大事なことを教えてくれる船旅なのかもしれない。✿

✿ 旅をどう彩るかは自分次第

最後にこれからピースボートに乗船する方へのアドバイスを聞くと、「さまざま不安があると思いますが、ずっと不安なままで旅には出られないと思うんですね



Profile 枝元なほみ (料理研究家)

1981年、劇団「転形劇場」の研究生になり、役者をしながら無国籍レストランで働く。劇団解散後はフリーの料理人に。一般社団法人「チームむかご」をはじめ、2011年の東日本大震災後は、被災地、被災者と非被災者をつなぐ「にこまるプロジェクト」をスタート。

このようにピースボートならではの船旅を存分に楽しんだ枝元さん。船内では世界の食に関する講演活動を精力的に行つた。「私が乗つたクルーズがアジアを起点に最後は南米を巡る航路だったので、それに沿つて世界の食文化を紹介しました。世界は大きく4つの食の文化圏に分かれるのですが、ただ文化とか環境が違うというだけで、そこにいいとか

✿ 「食」がテーマの講演活動

Life Onboard



枝元さんの講演は毎回大人気。世界が直面する食料問題や遺伝子組み換え食品、生産国と消費国との関係性など、講演の内容は多岐に渡った。



「こたえて枝元さん!」という企画では、出汁から世界の食を訪ね歩いた日々まで、参加者からさまざまな質問が寄せられた。



枝元さんが代表を務める「チームむかご」では、「食」に真剣に向き合い、日本全国で農業支援や被災地支援といった活動を行なっている。



洋上居酒屋「波へい」にいらつしやい！

旅で出会った仲間たちと楽しく賑やかに一杯やりたい。そんな方々で連日賑わうのが洋上居酒屋「波へい」。日本酒や焼酎も多く取り揃え、お品書きはまるで日本の居酒屋そのもの。毎日17時から深夜まで営業し、乗船者の憩いの場所となっている。



ピタン豆腐は根強い人気。定番から期間限定までメニューは充実。



寄港地で仕入れた生ハムを使った大人気の生ハムグリッシーニ。



波へいで楽しむことができる料理は和食をメインに、旬の食材や寄港地にちなんだメニューが並ぶ。こだわりはなんといても鮮度。寿司や刺身などで使われる鮮魚は築地市場で仕入れたものをマイナス60度の特別な冷凍庫に入れ、常に新鮮な料理を提供している。野菜や肉は寄港地で仕入れることも多く、生ハムやムール貝といった食材はバルセロナをはじめとした代表的な寄港地で仕入れ、期間限定メニューとして登場する。

そして波へいのもう一つの特長が、お手軽な価格。生ビールのジョッキは450円、日本酒は1合400円から。地球の裏側にいても日本酒、焼酎、お刺身、お寿司を楽しんでもらいたい。そういったコンセプトで始まったのが洋上居酒屋「波へい」だ。もともと船のデッキにぽつりと赤ちようちゃんを提げて始まった小さな屋台が波へいの原点。今よりも前にチャーターしていた船の頃から人気が出始め、今のスタイルになっている。

波へいの魅力を
ご紹介します！

店長の田村悠さん。自身も乗客としてピースポート地球一周の船旅を経験。乗船者の気持ちもわかる「食」に関する心強い味方だ。



1:ユニフォームも一新。何度も通えばスタッフとも顔なじみに。2:いつでも新鮮な魚が食べられるのはうれしい。3:世代を超えて盛り上ることも。



4:大人数の場合は豪華な寿司桶が人気。5:牛サーロインステーキは若者に好評。6:チーズ盛り合せはお酒との相性もぴったり。



6

と日本の居酒屋と変わらない。メニューも枝豆や冷奴をはじめとした品料理から締めのラーメンやうどんまで種類も豊富。17時からオープンしているため、夕食代わりに来る人も多い。

船内企画で仲良くなつたメンバーとの打ち上げや誕生日パーティーで使われることも多く、予約をすれば寿司桶を用意することも可能だ。最近では船内にあるバーティアラウンジでカラオケを楽しみながら波へいの料理を食べられたり、バー・カサブランカでウイスキーに合うおつまみをオーダーできたりと、波へいの楽しみ方はいろいろ。

店長の田村悠さんも「いかに飽きさせないかを常に工夫しています。食べたいメニューに関するご相談にも、できるだけ応えていきたいと思っています」と話す。過去には実際に乗船者からのリクエストで「揚げにんにく」が採用されたこともあるという。

第94回クルーズからは、カウンター席も新設。焼酎などのボトルキープも可能だというから、ひとりでゆっくり飲みたいときにも最適だ。ピースボートという10000人の村にある一軒だけの居酒屋「波へい」。船に乗つたらまず訪れてみたい名店だ。

人気メニュー BEST 3



第1位



第2位



第3位



他にもご飯ものや麺類もたくさん揃っています！

波へい丼

ここでしか食べられない特製の海鮮丼。なんといっても鮮度が売りだ。

広島産カキフライ

「まさか洋上で食べられるとは」という声が特に多いこだわりの逸品。

波へい特製パフェ

最近のクルーズから出されるようになった新定番。若い女性に大人気。

船上百景 [星空鑑賞会]



流れ星が見えるたびに乗船者からは、わあっと歓声があがった。

思わず見惚れてしまう
洋上のプラネタリウム

今日くらいは、ゆっくり星空を眺めてみよう。
そんなコンセプトのもと、プールデッキで開かれた「星空鑑賞会」。普段は明るく照らされていなかったデッキの照明が落ちると、浮かび上がったのは数えきれないほどの星々。さらにじつと見つめていると、ひとつ、またひとつと流れ星が横切る。日本にいるときには見ることができない満天の星空に参加者は大興奮。

「如<じ>」愛人」(によこ)あいじん)。
己を愛するが如く隣人を愛しな
さい——長崎で被爆し、最愛の妻
を失いながらも救援活動を行い、6
年後に白血病で命を落とすまで恒
久平和を祈り続けた永井隆博士
の言葉です。

ピースボートでは博士と同時代を生き抜いてきた170名を超える被爆者の方々と共に世界中で非核不戦のメッセージを訴えてきました。そんななか、今年7月に採択された核兵器禁止条約はとても重要な決議となりました。

しかし世界は未だに混沌としています。永井博士が今の時代を見たならば、「己の国を愛するが如く隣国を愛しなさい」と仰るような気もします。これは簡単なことではありますんが、まずは相手のことを知り、過去の歴史を学ぶことからはじめていきたいのです。

アジアの人々と共に国境線のない大海原をゆくピースボートの船旅だからこそできる体験は、未来の平和につながっていくと信じています。(N・I)

PHOTO:ノルウェー政府観光局,PEACE BOAT,Endoh Kazuhide,Kawano Momoko,Kajiura Takashi,Kataoka Kazushi,Letizia Diamante,Mizumoto Shunya,Matsuda Sakika,Masagaki Naoto,Nakamura Mitsutoshi,Shimomura Yu,Stacy Hughes,Suzuki Shoichi